

中国における「IT＋日本語」専攻の キャリア教育の研究

—— 複線径路・等至性モデル (TEM) による大卒生のプロセスの分析 ——

由 天 舒

1. はじめに

グローバル化に伴い、中国の経済は急成長し、中日貿易の関係も強化されるにつれて、日本との経済的な交流が活発化している(葛西 2013、長谷川 2014、潘 2014、于 2018)。特に日本のIT産業は、ソフトウェア・アウトソーシングする企業が多く、業務内容の変化もスピードが速い。それに加え、仕事現場で日本語を使う場面も多くあり、「IT＋日本語」人材育成の需要が大きくなっている。そして、IT専攻の学生に対し日本語科目を実用的で特色ある科目として設ける大学が増えている(孫 2015、仇 2016、潘 2014)。近年、「IT技術」と「日本語」が学習できる「IT＋日本語」という専攻は、人気が出ている。孫(2015)によると、2013年、遼寧省に日本語専攻を設立した大学(25校)の中で、「IT＋日本語」のような複合型の人材育成を目指している大学は92%(23校)を占めているという。

そして、日本語能力とソフトウェア開発の技術及び日本的ビジネスの知識を兼ね備えたグローバル化「複合人材」の養成が急務となっている(魯・廖 2011、潘 2014、于 2018)。厚生労働省(2018)は、「外国人労働者数は1,460,463人で、前年同期比181,793人、14.2%の増加(平成19年に届出が義務化されて以降、過去最高を更新)」と述べている。そのため、中国では多くの大学は日本の大学と日中連携の共同教育のプログラムを行っている(孫 2015)。「IT＋日本語」専攻の学生は、日本に行って日本語とITに関する知識を勉強したり、インターンシップをしたりするチャンスが多くなっている。

一方、多くの外国人が日本で活躍する機会を得ているが、母国とは異なる企業文化や待遇などの問題にも注目するべきであろう。しかし、大学も社会も、「IT＋日本語」専攻の在校生に対するキャリア教育はあまり重視していない。山本(2019:81)は、「特に日本語分野における留学生のキャリア支援を巡る現状について、関係者の意識と実態における様々なずれがあ

る」と指摘している。「IT + 日本語」専攻の学生にどのような専門的なキャリア教育を行っていくべきかを考えるため、本稿では、日本にある大学院のインターンシップコースに参加した後、続いて日本で IT の企業に就職できた A さんのインタビューを分析し、A さんがインターンシップから就職まで、どのような変容があったのかを明らかにする。そして、A さんの変容の実態を探り、「IT + 日本語」に関するキャリア教育への示唆を提示することを目指す。

本論文の構成は、第 1 章では、研究の背景と目的を紹介する。第 2 章では、中国人留学生が日本の IT 企業に就職する現状と日本企業の人材の募集条件と留学生の考え方との「ずれ」についてまとめる。そして、「IT + 日本語」を専攻とする学生のキャリア教育に関する教育不足の先行研究と人間の多様性や複線性を描き出す質的研究法の 1 つである複線径路・等至性モデル TEM（以後 TEM と呼ぶ）を用いて分析したキャリア教育の先行研究を概観する。第 3 章は、調査対象者及び分析の概要である。第 4 章は TEM 分析を通して、調査対象者とした A さんの分析内容である。第 5 章は、研究の結論である。第 6 章は、今後の課題である。

2. 先行研究

2. 1 中国人留学生が日本の企業に就職する現状

グローバル化が進み、日本では至るところで外国人を見かけるようになった。2017年の1年間の訪日外国人は2,869万1,073人に上る¹。少子高齢化の進展と日本の総人口の減少にともなう労働力の人口の急減を背景として、日本において、今後、人材不足の深刻化が予測される。そんな中、日本企業が海外企業と世界で競争をしていくためにも、優秀な外国人を採用して活用することが求められている（葛西 2013、守屋 2018）。

優秀な人材を獲得するため、また海外からの需要に対応するために、中国人の人材を雇用する企業が増えている。日本の学生支援機構²によれば、平成28年（2016年）5月1日時点で、日本で学ぶ外国人留学生は23万9,287人で、中国人留学生の人数は9万8,483人に達しているとのことである。日本に留学している留学生のうち約6割は、卒業後にそのまま日本で就職することを希望している（文部科学省平成30年）³。特に、専門的な知識が求められる IT 業界で、中国人の人材が注目されている⁴。中国の若者は IT に強い興味があり、プログラミングなどを学習していることから IT 人材として採用されるケースが多く見られるからである⁵。

2. 2 日本企業の人材の募集条件と大学の教育との「ずれ」

IT 専攻の日本語の学習者に関する研究は、理論を紹介する研究が多く、学習ニーズや学習動機の特徴及びそれに基づいた指導法についての研究は少ない。教員は、日本語を副専攻（「IT + 日本語」専攻の学生は日本語が副専攻になる）とする学習者の日本語学習に対する意識や考え方を把握しておくべきであろう。しかしながら、日本向けソフトウェア開発現場で活

躍できることを目的としている日本語学習者数が増加しているにも関わらず、IT 専攻の日本語学習者の学習ニーズ及び学習動機の特徴、また日本語主専攻学習者との違いは明確に把握されておらず、授業内容や指導方法などは日本語主専攻のものがほぼそのまま採り入れられている。大連地方では「IT + 日本語」コースのある大学は多いが、評価の基準はない。

日本のソフトウェア・アウトソーシング開発分野に関する中国の急速な発展とともに、中国の多くの高校もこの分野の人材育成に多方面からの探求を行っているが、全体的に見ても、「日本語」と「IT」の両方の教育資源を融合させておらず、IT 日本語の人材の育成の質はあまり理想的とは言えない。仇 (2016) は、近年中国における日本語教育が急速に発展しているにもかかわらず、カリキュラムの体系性や教科書の実用性にまだ解決すべき課題が多いことを指摘した。大学の教育モード、プラットフォーム建設、教員チームなどの側面で現在の IT 日本語の複合人材育成において何が欠けているかを分析し、IT 日本語の複合人材育成の方法と措置の改善が必要であろう。

IT 業界においてもビジネスの場面で日本語の使用機会が多いと推測されるが、実用性を持つ教科書とはどのような教科書であろうか。仕事中の言語面に関しては、場面別の待遇表現や慣用表現について、実務者の自発的な学習の重要性が強調されている。「IT + 日本語」専攻の教育現場からのニーズは李 (2002 : 256) によると、言語面と文化面、さらに教授法に分けて、以下のように述べられている。

言語面には、専門語彙や言語形式のようなミクロなものから話の切り出し方やまとめ方、意見の述べ方などよりマクロ的なレベルのもの、および待遇表現や断定回避表現のように文化的な要素が含まれたものが見られる。また、非言語的要素も取り上げられている。文化的な面としては、敬語行動をはじめ、企業における慣行や規範などが見られる。一方、教授法としては、基礎的な学習が促されつつ、場面シラバス、機能シラバス、話題シラバスを含んだ教育内容や教材開発、主体的な学習、実務者との接触、初級への導入などが見られた。 李 (2002 : 256)

加えて「IT + 日本語」専攻の課程設置は、IT 業界の実態から逸脱してはいけなく、主専攻の大学生の就職ニーズと IT に関する企業の求人ニーズの多くの要因を考えなければならないので、主専攻の学生のため、IT に関する仕事に適した教材や授業の内容を作成していると李は述べている。

2. 3 TEM を用いたキャリア教育に関する先行研究

本節では、TEM を用いた先行研究について説明する。中国における TEM を用いた先行研究は管見の限りではないので、日本における TEM を用いた先行研究を紹介する。TEM を用いたキャリア教育に関する研究は、主に「自己認識」、「人間関係」、「留学生のキャリア支援の実践の検討」、「留学生の日本語教育とキャリア教育の示唆」等に着眼した研究として、金田 (2018)、山本 (2019)、秋田他 (2019) を挙げることができる。

表1 TEMを用いた先行研究

研究者	研究の内容	研究の対象	研究の結果
金田 (2018)	社会福祉の専門職を目指すため、福祉教育の展開プロセス	社会福祉士実習を受講した学生（1名）Aのストーリー	社会福祉士実習のため、教育上の不足点が指摘された。
山本 (2019)	留学生のキャリア形成プロセス	日本国内での就職を経験した元留学生（1名）の留学から就職までのストーリー	留学生のキャリア教育に問題があることを指摘した。留学生のため、キャリア支援の不足点が強調された。
秋田他 (2019)	英語学位プログラムで学ぶ留学生の就職までのプロセス	日本のある私立大学の英語の学位プログラムで学び、就職が決まった元留学生（1名）のストーリー	多言語使用の環境下にある日本企業に就職した元留学生が抱える問題を取り上げた。特に強調されていたことは、大学時代のキャリア教育が十分ではなかった点である。

(筆者が作成)

金田（2018）は、社会福祉士実習を受講した学生A氏の半構造化インタビューのデータをTEMで分析した。金田（2018：89）は、A氏のデータから「社会福祉士実習に赴く」、「社会福祉専門職として働く」を等至点として分析した。一方、「社会福祉士実習に行かない」、「社会福祉専門職を目指さない」については、両極化した等至点とした。研究対象者A氏のストーリーは「社会福祉実習に臨むことを決断」、「社会福祉実習を通じた学び」、「ソーシャルワーカーとして働くことを選択」という3つの期間に分けられる（90）。A氏の社会福祉専門職に関して、そのプロセスから、①社会福祉士実習の重要性、②社会福祉実習以外の補完的な取り組みの重要性、③ソーシャルワークイメージの明確化の重要性の3点について分析・考察した（94-95）。調査結果からインターンシップや実習コースを経験した学生に上記の3点の変容がみられたことから、社会福祉専門の学生にインターンシップの機会や社会福祉士実習を提供する取り組みが重要であると主張した。

次に山本（2019）は、日本国内での就職を経験した元留学生（韓国籍1名）に半構造化インタビューを行った（84）。「日本でのキャリア形成を決意した経緯」と「キャリア形成に際しての困難」と、「困難を乗り越えた経験」の3点について時間軸に沿って聞き取りを行った（84）。キャリア形成に関する語りに基づき、TEMで分析した後、①大学を卒業して働き始めるまでの経験と葛藤、②それらの経験や葛藤を経て発生した認識や価値観の変容の2点について考察した（2019：84）。①の分析からは、留学生として日本語で言いたいことが言えない場合が多いが、周囲の人々と交流したい気持ちを持っていることから、言語の困難を乗り越え、日本語を始めとする自らの成長を実感していく過程が明らかになった。そして、②の分析からは、研究対象者は自身の実感として、自分の日本語や人間関係に関する大きな変容があったので、自分の成長が確認されたとしている。研究対象者のキャリア形成プロセスから、留学生のキャリ

ア支援に関する多くの調査研究において、就職や進学はキャリアの前提として位置づけられる傾向にあると述べている (2019:96)。社会で留学生に日本語教育の実践とキャリア支援を機能させる意義について、示唆している。

次に、秋田他 (2019) は、英語学位プログラムで学ぶ留学生の就職までのプロセスの研究を行なっている。TEM で日本のある私立大学の英語学位プログラムで学び、就職が決まった元留学生のインタビューの内容を分析した。研究対象者のストーリーは「入学からインターンシップまで」、「インターンシップから就職活動まで」、「就職活動から就職先まで」3つの期間に分けられた (15)。分析の結果、研究対象者は日本の企業で多言語使用の環境であるというイメージを持っていた (15)。しかし、実際の仕事現場は自分のイメージと違うため、最後は日本企業での仕事を辞めて、多言語の使用環境を求めて、シンガポールの企業で就職を決めたことが分かった。被験者は、英語学位プログラムで学ぶ留学生であったため、英語を用いた就職か、日本語を用いた就職なのか決められず、具体的なキャリア教育は得られず、卒業後のビジョンの具体化 (15) 等が示唆されていた。

以上は TEM を用いて分析した先行研究のまとめである。荒川・安田・サトウ (2012) は、TEM という分析方法は、1人のデータでも多人数のデータでも扱うことができると述べている。また、金田 (2018) は、荒川ら (2012:98) の先行研究から、「1・4・9の法則」(対象者を1名、4名、9名とする法則) を提案することができると述べている。従って、研究の対象者は1人であっても、TEM で分析することもできる。そこで、本研究においても個人の経験を描くライフストーリーの分析をするために1名を被験者として TEM を用いて分析することにする。

3. 調査及び分析の概要

3. 1 調査の対象者

本稿の調査対象者 A さんは、2011年9月から中国の D 大学のソフトウェア学院で「IT + 日本語」専攻で勉強して、4年生の時 (2014年9月)、日本でインターンシップコースに参加した。3ヶ月間のインターンシップコースが終わった後、自分で専攻に関する仕事を探して、2015年東京都で IT 企業に就職した。2018年10月と2019年8月に筆者のインタビューを2回受けた時、日本で IT に関する仕事を継続している状況であった。表2に調査対象者 A さんの概要を示す。

表2 調査対象者 A さんの詳細

出身地	専攻	就職先	職種	就業年数
中国の鞍山市	計算機科学と技術	東京都	SAP プログラムの編集	5年

(筆者が作成)

Aさんは大学で勉強するため、故郷を離れてD大学のソフトウェア学院に入学して、「IT + 日本語」（計算機科学と技術）専攻で勉強していた。4年生の時、校内の日本でのインターンシップコースに参加しに行くチャンスがあり、初めて日本に来た。3ヶ月のインターンシップコースが終わった後のAさんは、就職活動を通じて、東京都でSAP（システム分析とプログラム開発）に関する仕事を探した。Aさんは筆者のインタビューを受けた時、日本で働いた経験は、5年目になっていた。（表2）。

Aさんを調査対象者とした理由は、自分のキャリアについて変化が見られたからである。Aさんはインターンシップ開始の時点では、「海外での就職は考えておらず、ただ日本へ旅行気分、インターンシップに参加した」という考えであったが、インターンシップが終わった後、「日本で就職したくなった」という考えに変化したので、対象者とした。本研究ではAさんの就職先を決意するに至った経緯、また、考え方が変わる背景にはどのような要因があったのかを明らかにする。

3. 2 調査方法

本調査では、研究対象者に半構造化インタビューを行う。主に、質問内容は、以下の通りである。

- ①今の仕事の現状は何か
- ②なぜITに関する仕事を選択したのか
- ③就職活動のための方法は何か、そして心境の変化があったとすれば、それは何か
- ④就職後の様子（仕事内容や人間関係など）
- ⑤自分にとって日本語やIT技術とは何か

以上の内容について語ってもらった。対象者にある程度、自由に語ってもらうことを心掛け、対話の中で①から⑤についての質問を挟むような形でインタビューを進めて、データとして収集した。

筆者はAさんの大学の先輩で、インターンシップコースのTA（教授補助）を担当したので、信頼関係があるため、より良質な語りが形成できると考えた。インタビューの時間は約70分であった。中国語でインタビューして、調査対象者の同意の下、音声録音し、文字化した上で分析データとした。

3. 3 分析方法

本研究の分析方法では、収集したインタビューのデータに基づいて、TEMを用いて分析を行って、図式化した。

TEMは、「時間を捨象せずプロセスとして人間の発達や人生経路を捉える方法論」（安田・サトウ 2012）であり、「長い時間軸で、重要な出来事に焦点をあてて経験を追うことができる

という利点があるため、研究対象とする学生の変容がどのような社会的文脈のもとで起きたのかを時間的な視点を含めた過程に注目し、考察する (安田・サトウ 2012: 45) ことができる。そのため、この分析法の特徴は、研究対象の具体的な経験のプロセスを、時間を捨象せずに描き出すとともに、研究対象者の経験を社会との関係性のなかで理解することである (サトウ 2009)。人間を開放システムとして捉えるシステム論に依拠する点、また、時間を捨象して外在的に扱うことをせず、個人に経験された時間の流れを重視する点にある (安田・サトウ 2012)。

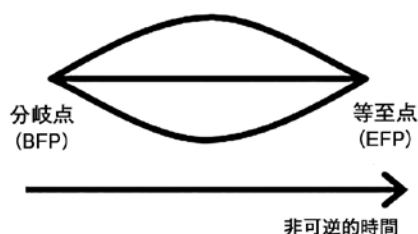


図1 TEM図の最小単位 (安田・サトウ 2012)

秋田他 (2019: 14) は、安田・サトウ (2012: 45) の先行研究から、「TEMは時間を捨象せずプロセスとして人間の発達や人生径路を捉える方法論であり、長い時間軸で、重要な出来事に焦点をあてて経験を追うことができるという利点がある」と述べている。そのため、Aさんのインターンシップから就職までに至るプロセスを描くことは本研究の方法として適していると筆者は考える。

3. 4 TEMによる「IT＋日本語」専攻のキャリア教育

本節では、Aさんのインタビューのデータに基づいて、TEM図の構成概念を提示し (表3)、TEMによる「IT＋日本語」専攻のキャリア教育の研究を説明する。

表3 TEM図の構成概念で本研究の分析

用語	概念	本研究における意味
等至点 (EFP)	ある定常状態に等しく辿りつくポイントとして、研究当初に研究者が設定したもの	EFP-1: 日本でIT関連の仕事を選択 EFP-2: 日本でIT関連の仕事継続する選択
両極化した等至点 (P-EFP)	等至点と対になるような地点	P-EFP-1: 日本でIT関連の仕事に就かない P-EFP-2: 日本でIT関連の仕事辞める
必須通過点 (OPP)	ある地点に移動するために必ず通るべきポイント	OPP-1: 日本でインターンシップコースへの参加 OPP-2: 日本語教室に行く OPP-3: 大学卒業

用語	概念	本研究における意味
分岐点 (BFP)	径路が発生・分岐するポイント	BFP-1：日本で就職活動を見学 BFP-2：ソフトウェア・アウトソーシングの会社に応募 BFP-3：日本で IT 関連の仕事に就く BFP-4：会社でチームリーダーと同僚に助けもらった
社会的助勢 (SG)	等至点 (EFP) に向けて援助的に働く力	SG1：日本で生活に慣れた SG2：ソフトウェア・アウトソーシングの会社は N1 不要・話す能力を重視する SG3：日本で社会人としての生活にも慣れた SG4：仕事から達成感を感じた
社会的方向づけ (SD)	等至点 (EFP) への径路を阻害・抑制する力	SD1：N1を取らない SD2：両親が同意しない SD3：仕事の内容が難しい

(筆者が安田・サトウ 2012：75を基に作成)

TEM 図を構成する要素は 6 つあり、最も重要となるのが「等至点 EFP」である。等至点は研究において対象となる現象であり、本研究では「IT + 日本語」専攻の大卒生として、日本でインターンシップのコースに参加した後、日本で IT に関する仕事を選択したという行為が焦点化される部分である。そのため、本研究における等至点を「日本で IT 関連の仕事を選択」と「日本で IT 関連の仕事を続ける選択」とした。

構成要素の 2 番目は、この等至点とは反対の選択となるものを「両極化した等至点 (P-EFP)」として設定する。両極化した等至点は、サトウ他 (2006) によって生成された概念である。等至点は実際に選択されたものであるのに対し、進む可能性のあったもう 1 つの選択が両極化した等至点である。本研究における両極化した等至点は、「日本で IT 関連の仕事に就かない」と「日本で IT 関連の仕事を辞める」と設定した。

構成要素の 3 番目は、「必須通過点 (OPP)」である。サトウ (2009) は、必須通過点はもともと地理的な概念で、ある場所に到達するために必ず通らなくてはならないポイントという意味で、TEM にも取り入れている。本研究では「日本でインターンシップのコースへの参加」、「日本語教室に行く」、「大学卒業」を必須通過点として設定した。

構成要素の 4 番目は、「分岐点 (BFP)」である。こうした時間の流れのなかで、それまでの有り様が分かれていくわけであるから、サトウ他 (2006) では、分岐点は、人の行動や経験が変容したポイントとみなすことができ、歴史的・文化的・社会的な諸力の影響を受けていると述べている。本研究では、「日本で就職活動を見学」、「ソフトウェア・アウトソーシングの会社に応募」、「日本で IT 関連の仕事に就く」、「会社でチームリーダーと同僚に助けもらった」を分岐点として設定した。

構成要素の5番目は、設定した等至点の方向へと後押しする要因としての「社会的助勢 (SG)」である。サトウ他 (2006) では、「社会的助勢は等至点に向けて援助的に働く力」と述べている。本研究では、「SG1: 日本で生活に慣れた」、「SG2: ソフトウェア・アウトソーシングの会社はN1不要・話す能力を重視する」、「SG3: 日本で社会人としての生活にも慣れた」、「SG4: 仕事から達成感を感じた」を社会的助勢として設定した。

構成要素の6番目は、等至点への方向を阻害する要因が「社会的方向づけ (SD)」である。サトウ他 (2006) では、「等至点への径路を阻害・抑制する力」と述べている。本研究では、「SD1: N1を取らない」、「SD2: 両親が同意しない」、「SD3: 仕事の内容が難しい」を社会的方向づけとして設定した。

4. A さんの変容 (キャリア形成のプロセス): TEM 分析を通して

分析の結果、TEM 図が作成できた (図2)。その結果、「日本の IT に関する企業で働く決断 (第1期)」、「大連で就職活動する選択から日本へ行って就職する選択 (第2期)」、「日本で仕事を続ける選択 (第3期)」という3つの期間区分で推移していることがわかった。以下、A さんの日本で IT 企業に就職するまでのプロセスの内容を説明する。

4. 1 日本の IT に関する企業で働く決断

A さんは、「海外で就職する目的ではなく、ただ日本へ旅行に行きたい」と考えインターンシップに参加した。2011年9月から、中国の大学の「IT + 日本語」専攻で3年間の勉強し、日本の風土や文化について知っており、日本の化粧品やファッションにも興味を持っていた。しかし、日本に行ったことがなかったので、ずっと教科書に書いてある日本の様子を直接、自分の目で見てみたいと思った。2014年9月、A さんは4年生の時、学内で日本でのインターンシップコースに参加するチャンスがあったため、初めて日本に来た。インターンシップコースに参加したもう1つの理由は、コースの期間は3ヶ月だけで短いからであった。日本に来る前に、A さんは故郷と学校以外で生活したことがなかったため、海外で1人で生活することに自信を持っていなかった。コースの期間も短く、学校の先生と同級生と一緒に行くので、最終的に決心が付いて、両親を説得して、インターンシップコースに参加することになった。

日本に来た後、A さんは日本の IT に関する大学院で IT 技術と日本語を学んだ。多くの学生は初めて日本に来たので、日本の生活にも慣れるのに苦労した。そして、学生たちは日本語専攻の学生ではなかったので、基本的な会話もできず、日本での生活は難しかった。そのため、日本の IT に関する大学院は日本語も学生たちに教えていた。2ヶ月のインターンシップコースの勉強を通して、A さんは「海外で生活が怖くない」と考えるようになり、「自分でデパートへ買い物に行くことができる」、「神社など観光地へ行った時、バスにも乗れるし、観光

地のガイドブックも理解できる」ようになった。自分はIT専攻の学生なので、大学院からの実習プログラムがいつも順調だったため、時間にも余裕が生まれ、買い物や旅行の時間が多くなった。そして、滞在1ヶ月後になると、Aさんは自分が最初に思い描いた通りの生活をするができるようになった。

インターンシップコースの最後の1ヶ月の期間、大学院は学生たちにIT企業から校内の講座など就職活動の機会を提供した。そして、日本のIT企業へ訪問に行くなどのイベントも実施した。Aさんは日本のIT企業の仕事現場を見た後、「もし日本で就職すれば、自分の価値を見出せるかもしれない」と考えるようになった。Aさんはずっと中国で生活するのは、チャレンジ精神があまりないと感じた。そして、インターンシップコースを終えて故郷に帰り両親のそばでリラックスしてできる仕事を探す予定があるにもかかわらず、日本の仕事に魅力を感じるようになった。「インターンシップコースに参加した後、日本の生活を知っている」、「日本の仕事現場の雰囲気が好きだ」、「みんなは一生懸命に仕事する様子がかっこいい」と考えるようになった。

しかし、インターンシップコースの時間が残り少なくなったため、Aさんは日本で就職活動を続けられなくなった。日本で働きたいという考えについて大学院の先生と相談した後、先生は大連で就職活動をしてから、中国内の会社で日本に行く仕事を探すように勧めてくれた。そして、Aさんの場合はあと半年で卒業するが、今すぐには就職できない。結局、インターンシップコースが終わった後、Aさんは大連に戻った。

4. 2 大連で就職活動する選択から日本へ行って就職する選択

日本で楽しい3ヶ月のインターンシップコースを過ごしたので、Aさんは、「自分の成長のため、やはり日本へ就職に行く」と決意していた。しかし、Aさんは自分の考えを両親に話したが、親の同意を得られなかった。親の立場からいうと、Aさんには海外で1人で生活したり、就職したりする能力がないと思っていた。そして、Aさんは家族の中で1人っ子だったので、ずっと進学というような重要なことは両親が決めてきた。Aさんには両親に対して発言権がなく、自分でも重要なことは何も考えなかったが、今回、Aさんは諦めずに、両親と何度も相談した。両親は「Aさんが日本語をよく勉強してから、日本に行くことを望んでいる」と言っていた。

その時、Aさんは「日本で仕事をするにしても、ビジネス日本語ができないことが心配」であり、大学の先輩から紹介された日本語能力試験を受けるための教室に通い始めた。この日本語教室は、単に日本語を教えるだけでなく、留学先を紹介してくれたり、日本での就職先を紹介してくれたりする学校で、ビジネス経験を持つ日本人講師が、受講生（日本語能力試験を受けたい人）に日本語を教えるというものであった。授業中、Aさんは担当の教師から日本でビジネス関係の仕事の内容や仕事現場の様子などの情報を貰った。そして、周りの受講生も、Aさんと同じ目標があったので、Aさんはすぐに受講生と友達になった。そして、Aさんは授業にもすぐに慣れて、授業後は、仲の良い受講生と復習をしに行ったり、食事に行ったり

した。このような経験が、Aさんの将来に大きく影響を与えた。Aさんの話によると、もし、この学校に通っていなかったら、日本に就職に行くことができなかったらと振り返っていた。

2015年6月に卒業予定のAさんは、半年間の日本語教室での勉強の後、3ヶ月ほど、就職活動を行った。日本語教室での勉強を通して、Aさんの日本語のレベルはインターンシップのコースに参加した時より、高くなったため、就職の面接について自信を持っていた。Aさんは大連の日本企業に入社してから、日本に派遣されることを希望していた。しかし、Aさんは、日本語能力試験1級(N1)に合格していなかったため、N1合格が応募条件である大連での日本企業に勤めることは断念せざるを得なかった。

大学を卒業した後、Aさんはインターンシップのコースと一緒に参加した同級生に連絡を試みた。その同級生から、大連でソフトウェア・アウトソーシングの会社が新入社員を募集しており、その新入社員は、日本に派遣されるということを知った。Aさんは、早速、その会社へ面接を受けに行った。その会社は、日本語を話す能力を重視していることから、応募者がN1の資格を取ってなくてもよかったので、Aさんは面接に合格した。2ヶ月後、Aさんは日本の仕事ができるビザを取って、東京に戻るようになった。これまでの語りを以下、TEM図で示すこととする(図2)。

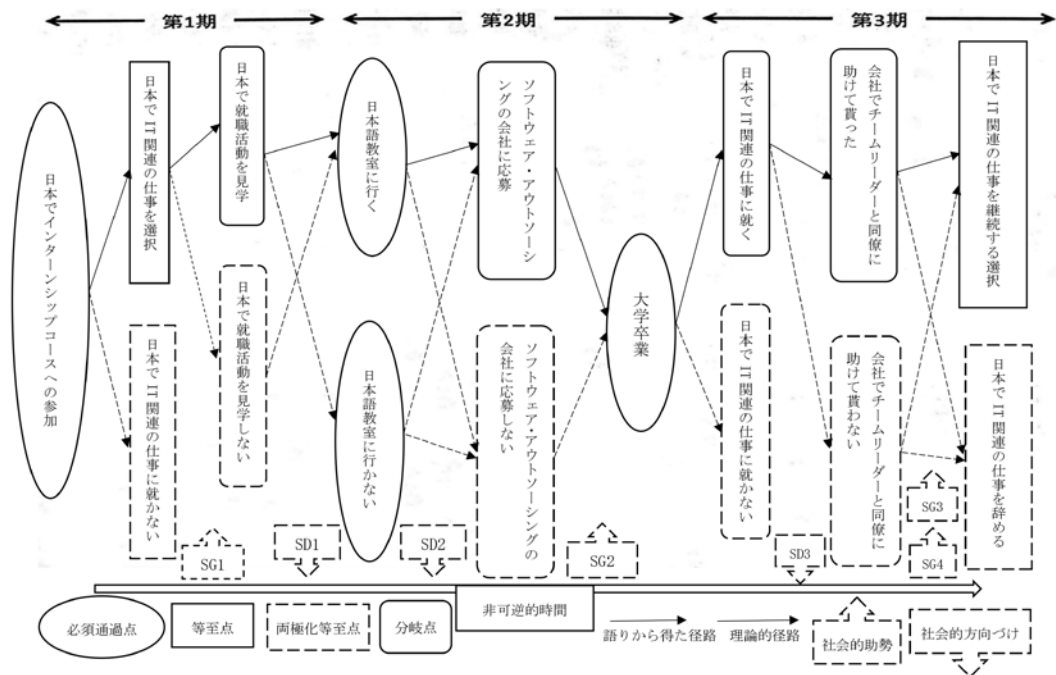


図2 「IT+日本語」専攻を目指すためのキャリア教育の展開プロセス

4. 3 日本で仕事を続ける選択

Aさんにとって今回の日本での就職は、2度目の日本滞在であり、1度目の3ヶ月のインターンシップのコースに参加した時より、緊張しなかった。しかし、「仕事内容が難しい」と語っていた。東京で仕事を始めた後、IT技術に関する業務の量が予想以上に厳しく、特に大学で勉強したプログラム編集のシステムと違っていたため、毎週の残業についていくのがやっとなことであり、SAPに関する知識を自習する余裕がなかったことも語っていた。Aさんは日本でITの企業の仕事ができるかという大きな悩みを抱えるようになった。

実は、Aさんはキャリア教育の授業を履修していたにもかかわらず、インターンシップコースに参加する前に、ITに関する仕事内容や仕事現場の様子等のことを殆ど知らなかった。インターンシップのコースに参加した後は、ITの会社について大体の状況を理解したが、まだ分からないことが多くあった。大学時代には、既存するキャリアに関する科目を勉強したが、その学びは、ITの専門に特化したものではなく、全ての専攻の学生が共通の教科書を使用していたため、「IT + 日本語」専攻に関するキャリア教育の内容を学んでいなかった。従って、仕事やインターンシップで使用するITに関する知識も現場でどのようなスキルが重要なのか、学ぶことができなかった。Aさんが、大学で学んでいる間は、将来に役立つ仕事現場の情報ももらえなかったようで、「大学時代は、仕事現場に関する情報が欲しかったが、もらえなかった」という語りがあった。

Aさんは多忙の中、2ヶ月後、風邪を引いて熱を出し体調を崩してしまった。会社のチームリーダーに1日の休みを申請するしかなかった。翌日、Aさんは会社に来た時、チームリーダーに呼び出された。非常に緊張したAさんは、チームリーダーの事務室へ行ったが、チームリーダーがAさんのことを全然責めることなく、ストレスが溜まる原因を聞いた。Aさんは自分の苦しい現状をチームリーダーに全部話していて、「分からないところがあれば、先輩達に聞いたほうがいい」というアドバイスを貰った。そこでAさんは、ここまで取って敬遠していた先輩達にお世話になることを決意した。結果として、先輩達の丁寧な指導のもと、自己でSAPの練習を繰り返す中で、徐々に上手になっていった。そして、自信がついたAさんは、今の仕事を継続したいという思いが強くなる。「仕事から達成感を貰う」と述べて、「確かに仕事現場で毎日新しい挑戦があるが、生活も慣れた」と思っていたので、日本でIT関連の仕事をしてやって行きたいと考えるようになった。

本章ではAさんの日本でIT企業に就職するまでのプロセスの内容について述べたが、次の章では、データの結果から筆者の考察を結論として述べることにする。

5. 結論

中国における「IT + 日本語」専攻を目指すためのキャリア教育の展開プロセスを、以下の2点にまとめることができた。まず、大学時代のキャリア教育は、全ての専攻の学生が履修するIT関

連のものではなかったため、IT 関連の仕事をする上では、何の役にも立たなかったということがわかった。結果、Aさんは、就職した後、ストレスを抱え体調を崩してしまい、上司の力をかりながら、仕事を徐々に覚えていった。もし、Aさんが、IT 専門のキャリア教育をしっかりと大学時代に受けていれば、このようなストレスや困難さを感じていなかったかもしれない。換言すると、「IT + 日本語」の学生にとって、IT に特化したキャリア教育を受ける必要があり、Aさんの大学が実施しているキャリア教育では十分ではないことが、Aさんの語りから明らかとなった。また、キャリア教育の重要性についてもAさんもご両親も意識していないことがわかり、その点も指摘しておきたい。

中国では1980年から2002年まで、都市の市民（漢族だけ）を対象に「計画出産」政策を実施していた。その間にほとんどの家庭は1人っ子しかいない状態になり、子どもをここのほか溺愛するようになった。親は、子どもの仕事だけでなく人生の計画も親が決めることがほとんどである。その結果、子どもの本当の意欲を見落とすばかりでなく、子どもが自分で選択する能力を持ってなくなってしまうこともある。Aさんのようなケースには、少子化といった社会構造的な背景がある。近年では、社会で求められる力として「問題解決力」、「継続的な学習力」、「チームワーク力」などの能力やスキルがよく挙げられている（魯・廖 2011、王 2014）。しかし、キャリア教育に関する知識と認識が不足しているため、大卒生は仕事現場から出た問題を解決する能力を備えていないので、職場で多くの問題に直面している。

誰かの手配した仕事ではなく、自分の興味から仕事を選んだほうが良いという考え方もある。そうすれば、仕事に対するやる気があるので、仕事での問題に直面する勇気も持てる。勇気があれば何かを体験しても、心が自然に強くなることに気づくだろう。仕事に対して真面目に対応すれば、いつか、すらすらと解決するようになり達成感も出てくる。そのため、大学生は知識だけでなく問題の解決力を身につけなければならない。大学生の興味がある仕事を探す能力を育成して、そして仕事に対する情熱を持たせることが大切である。

次に、「IT + 日本語」専攻に対するキャリア教育の研究の重要性である。Aさんのライフストーリーの語りから、「大学のキャリア教育の授業で、IT 関係の企業の情報や仕事現場の内容等、学習者の知りたい知識が含まれていないので、専攻に関する仕事の関連性をもっと授業で取り入れてもらいたい」という語りがあった。大学生は本専攻の就職の状況をあまり知らないため、未来の仕事に対する理解がなく、学習内容への興味とやる気を失う状況が多くなる。その反面、日本で就職と考える学生が多いが、日本企業の業務内容や企業文化について知らない、日本で就職の困難度が増す。IT の職場で日本語を使用して仕事を行っている際の問題や摩擦をもたらす共通した要因は何かということを明らかにすることが求められる。「IT + 日本語」専攻のキャリア教育にとって重要な内容を選定するには、本専攻の大卒生が実際の職場でどのような問題に直面するかを明らかにし、その内容を授業で反映させる必要がある。

そして、多くの「IT + 日本語」専攻の大学生の IT 業界に対する認識には誤りがあり、IT に従事すれば報酬は十分に貰えると思っている。しかし、IT 業界では仕事の経験を積み重ね

ることが必要だ。1人で海外でのビジネスマナーや習慣を身につけるのは簡単ではないため、教育者は自校の大学生の現状を把握し、大学の入学後の早い段階で、多様な学びの経験を与えていくことが、大学のキャリア教育にとって重要な課題であると考えられる。

2点をめぐって「IT + 日本語」専攻に関する大学生に専門的なキャリア教育を行い、希望を実現させるために何をすればよいかを考えさせることで、大学生の不安は大きく払拭されるだろう。大学在学中から卒業後も継続して自身を成長させることにより、社会に適応できるだけでなく、社会の発展や創造への貢献もできる。若手社会人の実態と社会で求められる力のギャップを、大学のキャリアの授業でどのように扱うか考えなければならない。

6. 今後の課題

本研究では、1人の「IT + 日本語」専攻の大卒生の5年間の流れを分析した。研究対象者は「日本のITに関する企業で働く決断（第1期）」、「大連で就職活動する選択から日本へ行って就職する選択（第2期）」、「日本で仕事を続ける選択（第3期）」の期間分区から、中国における「IT + 日本語」専攻を目指すためのキャリア形成を描くことができた。「IT + 日本語」専攻の大卒者の視点から、大学で日本語とIT技術を学ぶことと、あるいは必要とされる能力を学んできたこと等の重要性が明らかとなった。

TEMにおいては、安田・サトウ（2012：45）に従い、研究対象とする学生の変容がどのような社会的文脈のもとでおきたのか、時間的な視点を含めた過程に注目し、考察した。この点を踏まえ、同じ仕事の経験を持っている「IT + 日本語」専攻の大卒者のライフストーリーから、1つのモデルを示した。今回は1人の「IT + 日本語」専攻の大卒生に対してインタビューのデータを分析した。今後は複数名の中国における「IT + 日本語」専攻の大卒者を研究対象者として、「IT + 日本語」専攻のキャリア形成においてどのような影響があるか、さらに具体的な示唆が得られるような研究を進めていきたい。

【注】

- 1 「外国人の労働問題 - 労働問題に注力する弁護士が解説」 <https://www.fukuoka-roumu.jp/diversity/diversity-2> 2021年10月31日アクセス
- 2 「【2020年版】外国人エンジニア採用データ」 <https://biz.jopus.net/it-engineer/data-2020.html> 2020年7月11日アクセス
- 3 「日本で仕事をしたい！中国人の就職活動と日本企業の現状まとめ」 <https://www.f-ship.jp/global/column/20180813-78/> 2021年10月31日アクセス
- 4 「中国人が日本で就職するのは難しい？その現状について解説」 https://www.imagenext.co.jp/column/chinese_japan_employment/ 2021年7月11日アクセス
- 5 「中国人が急増しているが日本で仕事を見つけるのは大変?! 数字で見る就職事情」 https://global-saiyou.com/column/view/chinese_work 2020年7月14日アクセス

【参考文献】

和文文献

- 秋田美帆・梨本麻理子・三上文香（2019）「英語学位プログラムで学ぶ留学生の就職までのプロセス—日本での就職を選ばなかったTにとって日本語学習はどのような意義があったのか—」『日本語教育方法研究会誌』25.14-15.
- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ（2012）「複線径路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例」『立命館人間科学研究』25.95-107.
- 李志暎（2002）「ビジネス日本語教育を考える」『言語文化と日本語教育』5.245-260.
- 金田喜弘（2018）「社会福祉専門職を目指すための福祉教育の展開プロセス—複線径路・等至性モデルによる分析」『福祉教育開発センター紀要』15.85-97.
- 葛西和恵（2013）「中国進出日系企業の採用・人材育成—キャリア形成の実態と課題—」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』10.251-289.
- 仇文俊（2016）『中国におけるビジネス日本語教育に関する基礎的研究：教育の体系性と実用性を中心として』九州大学比較社会文化学府
https://catalog.lib.kyushuu.ac.jp/opac_download_md/1789426/scs0270_review.pdf.
- 厚生労働省『「外国人雇用状況」届出状況まとめ（平成30年10月末現在）』
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_03337.html. 2021年9月20日閲覧
- サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヤーン（2006）「複線径路・等至性モデル—人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して—」『質的心理学研究』5.255-275.
- 長谷川拓哉（2014）「日本における外国人労働者問題」早稲田大学教育学部卒業論文「初めての外国人雇用外国人スタッフの人事労務管理 Q&A 集」
<https://www.eriw-office.com/category/1748894.html>. 2021年8月10日閲覧
- 守屋貴司（2018）「外国人労働者の就労問題と改善策」『特集グローバル化と労働市場—マクロ・ミクロの影響』30-39.
- 安田裕子・サトウタツヤ（2012）『TEMでわかる人生の径路—質的研究の新展開—』誠信書房.
- 山本晋也（2019）「留学生のキャリア教育形成プロセスとは何か：TEM及びTLMGによる可視化を通じて」『早稲田日本語教育学』27.81-99.

中国語文献

- 于珊珊（2018）「应用型本科大学“专业＋日语”复合型人才培养模式研究」『湖南科技学院学报』39(07). 115-116.
- 王鑫彤（2014）「外资企业就业情况研究」『林区教学』1.115-118.
- 孙辉欣（2015）「谈日语专业人才培养模式的改革与创新—以大连东软信息学院为例」『黑龙江教育学院学报』34(07). 175-176.
- 潘丹阳（2014）「中国商务部2013年软件服务外包业的运营状况报告发表」『中国软件和服务外包』2月号
<http://www.doc88.com/p-0932681368812.html>. 2021年9月20日閲覧
- 鲁强・廖华英（2011）「大学生外企就业的跨文化障碍分析」『东华理工大学学报（社会科学版）』30(04). 380-382.

（ゆう てんじょ：城西国際大学大学院人文科学研究科博士課程比較文化専攻在籍）

Study of Career Education for “IT + Japanese” Majors in China: Analysis of the Process of a College Graduate Using the Trajectory Equifinality Model (TEM)

You Tianshu

This paper focuses on the narrative of a university graduate who graduated with a combined major in “IT + Japanese” from a Chinese university and was able to find a job at a Japanese IT company after participating in an internship course in Japan. This university graduate was interviewed, and her answers were analyzed in relation to 1) her experiences and struggles from taking part in the internship course to finding a job, 2) the changes to her thinking and values regarding finding a job due to her experiences and struggles, and finally 3) what Japanese language and IT technology mean to her.

The results of the survey showed that the university graduate’s knowledge derived from her university major, such as “Japanese language”, “human relations”, and “perception of one’s own abilities”, significantly changed. Before participating in the internship program, she had “no confidence”, “no confidence in living abroad”, and “no knowledge of IT-related work sites and contents”. It became clear that she had changed her way of thinking based on her experience gained from the internship program, stating that “I can speak Japanese for work,” “life in Japan is convenient,” “I understand the work of IT companies,” and “I have got used to working life”. Based on the above, this paper explores the reality of the transformation of the research subject and presents suggestions for career education regarding “IT + Japanese”.